

わかりやすい授業

どんな学習をするのかがわかる本時のねらい

10月11日(火)3校時に、2年1組で工藤ひろみ先生による数学の研究授業が行われました。学習指導案を見ると、本時のねらいが、次のように、きちんと基本形で書かれています。ポイントは下線部です。[学習内容]について、[学習活動・手だて]により、[目指す姿]できる。

ペットボトル飲料の温度が 10°C 以下に保てる時間を予想することについて、時間と温度の関係を1次関数とみなして考えることにより、表やグラフを使って求める方法を説明することができる。

この時間に何をやるのか、どんな学習をするのかがよくわかります。本時のねらいがあいまいだと授業もわかりにくいものになってしまいます。

「子どもの姿」には単元における子どもの姿を記述する

学習指導案の「3 単元について (2) 子どもの姿」の内容を見ると、数学が好きとか嫌いとか、積極的に手を挙げるとか挙げないとか、まじめに取り組むが個人差が大きいとか、単元レベルではなく教科全体に関わるような記述を見ることはないでしょうか。

ここでは、単元における子どもの姿を記述します。工藤先生の「子どもの姿」には、本単元で扱う1次関数につながる記述があります。

- 1年生までに学習した比例と反比例については、その意味や性質を理解している生徒が比較的多い。しかし、その関係を式で表すことについては変数が x 、 y の2つになるために、難しいと感じている生徒が多い。ふくしま学力調査の学年結果から正答率を比較すると、関数の領域において、県が53.3に対して、本校が57.3と高くなっており、他の領域と比べるとよい傾向にある。

学習課題の共書き(聴写と視写)

工藤先生は、以下のように、ゆっくり区切りながら、学習課題をまず全員に聴写させていました。

10°C になるまでの時間を / 予想するには / どうすればよいだろうか。

聴写は、できる生徒もいれば、できなかった生徒もいます。その後、黒板に学習課題を書きました。聴写ができなかった生徒は、それを見て学習課題をノートに書きました。先生は、「意味がわからない言葉はないでしょうか」と問いかけます。生徒にとって親密度の低い言葉の確認です。

7分間の自力解決でじっくり考える

課題を解決するために、表とグラフのどちらがやりやすいかと投げかけます。ノートに貼れるサイズに切ってある表とグラフのシートを両方配ります。生徒に自分で選ばせます。授業に自己決定の場があることは大切なことです。早く終わった生徒には、もう片方にも取り組むように指示します。全員が集中して、じっくりと取り組んでいました。

その後、「自分がどういうふうに考えたのか、隣の人に説明してください。伝えてください。」と指示しました。「説明できる」ことは、理解のレベルの中で最も高いものであり、本時のねらいでもあります。

この授業では、自力解決、ペア、全体と、生徒はずっと課題のことを考えていました。一つのことをじっくりやることは、わかりやすい授業につながります。

まとめと振り返り

授業の最後には、先生は生徒に「1次関数は便利、先のことまで予測できる」というメッセージを伝えていました。振り返りでは、「どういうときに1次関数とみなすことができるのか」という振り返りの視点を与えていました。

2年1組の黒板には、「課題」と「まとめ」のマグネットシート、タイマーの3つしかありません。黒板は、不要な掲示物を貼らずに、できるだけ全面を教科の学習で使えるようにする必要があります。その方が生徒も集中できます。また、発問や指示にも無駄がありませんでした。わかりやすい授業の要件をいくつも確認できた授業でした。